The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宇治十帖＜解体＞と＜閉塞＞の論理（下）
Author(s)	中井, 賢一
Citation	詞林. 2007, 42, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67569
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宇治十帖〈解体〉と〈閉塞〉の論理（下）

中井　賢一

三　「栄華」を〈解体〉する力と「明暗〈一対〉」の構図

ここまで「『宇治』という〈場〉」の力が、「都」における〈二層〉―「罪の恋と栄華」の〈層〉と「恋と栄華」の〈層〉―の「栄華」を、いずれも〈解体〉していく様相と、その仕組みについて辿ってきた。「『宇治』という〈場〉」に関わることによって、「罪の恋」と「栄華」の関係が、あるいは「恋」と「栄華」の関係が、第二部までの物語のように、常に「栄華」を拡大するものとしてあることが最早適わなくなっている、ということが知られる。宇治十帖に至って、「罪の恋」と「栄華」の関わり方、そして「恋」と「栄華」の関わり方は、そのベクトルの向きを逆転させつつあると言えよう。では、果たしてなぜ「宇治」が、それら「逆転」を導き、〈二層〉の「栄華」を〈解体〉する力源になりうるのか。そして、〈解体〉の〈場〉としての「宇治」がいかに物語構造と関わるのか。まずは宇治世界が生成する経緯から確認しよう。

「『宇治』という〈場〉」が、最初にそこに身を置いた人物、八宮によって築かれた〈場〉であることに異論は無かろう。では、ここで宇治八宮の動きを辿り返してみよう。なお、引用は、考察の便宜上、巻順に拠っていない。

a（八宮は）源氏のおとゞの御おとうとにおはせしを、冷泉院の東宮におはしましし時、朱雀院の大后の、横さまにおぼしかまへて、この宮を世中に立ち継ぎ給ふべく、わが御時、もてかしづきたてまつりけるさはぎに、あひなく、あなたざまの御仲らひにはさし放たれ給ひにければ、いよ〳〵かの御次〳〵になりはてぬる世にて、えまじらひ給はず。また、この年ごろ、かゝる聖になりはてて、いまは限りとよろづをおぼし捨てたり。

（橋姫巻三〇四頁）

b（八宮は）父みかどにも（母）女御にも、とくをくれきこえ給ひて、はかばかしき御後見の取り立てたるおはせざりければ…

（橋姫巻三〇三頁）

c（八宮の）北の方も、むかしの大臣の御むすめなりける、（―中略―）いといたくわづらひて亡せ給ぬ。

（橋姫巻二九八～二九九頁）

dかゝるほどに、住み給ふ宮焼けにけり。いとゞしき世に、あさましうあえなくて、移ろひ住み給ふべき所の、よろしきもなかりければ、宇治という所に、よしある山里持たまへりけるに渡り給ふ。思ひ捨てたまへる世なれども、いまはと住み離れなんをあはれにおぼさる。

（橋姫巻三〇四頁）

まずaより、八宮が、冷泉廃太子計画を進める弘徽殿女御に担がれた挙げ句、冷泉方に敢えなく敗北し、逆に追放されてしまったことが知られる。bより、「父みかど」桐壺帝にも、母「女御」にも死別し、後見人の不在が知られる。就中、母方の後見が望めないことに注意しておく。cより、「北の方」の死去と、それに伴う「むかしの大臣」との断絶、つまり、妻方の後見が断絶していることが知られる。dより、自らの「宮」を焼失したとき、転居できる邸が都にはなく、宇治にしか転住できなかったことが知られる。

私は、いたずらに八宮の不幸の歴史を列挙したいのではない。私が注目したいのは、地位、両親の後見、姻戚関係による後見、中央での本拠地、等、都における権力に繋がる諸条件を、八宮が一旦は手にしそうになった後、あたかも都から徐々に足場が無くなっていくかのごとく、ことごとく喪失させられている点なのである。藤本勝義氏は、「八宮は桐壺帝皇子であり、母に某大臣の娘の女御をもつ、かなり有力な親王であった。だから、別の大臣も八宮の将来を嘱望し、娘を嫁して立后の望みを託した。冷泉院立太子がなければ、この八宮が春宮となり帝位を極める可能性は強かった」とされた上で、「八宮論のために見過ごすことができない要素は、第三部では主題的意味をもつとは思えない王権の問題であろう。八宮は、冷泉院の立太子前と、弘徽殿一派に擁立された時の二度、帝位への絶好の機会を有したことになる。なぜかくまでして、八宮を王権と深く関わらせて登場させたのか」と、八宮がいわゆる「王権」と関わって複数回描かれる点を指摘されている[17]が、八宮を「王権」という概念と取り合わせることの適否はともかく、八宮が「栄華」を手中に収める可能性を何度も描かれている人物である点を明確に言われたことは傾聴に値する。八宮は、都から徐々に足場を失うことで、同時に都の「栄華」からも必然的に徐々に遠ざけられているのである。つまり、八宮の宇治行きについて大切なのは、親王としてあり得た「都の『栄華』」の可能性の喪失、という観点なのではないか。

確かに、aの叙述からは、八宮は冷泉方に敗北することで政界から排斥されたこと明らかであり、その意味で、鷲山茂雄氏の言われるとおり、八宮を「光源氏的世界の裏にうごめく負なる存在[18]」と見ることも妥当であろう。しかし、bcdに示される八宮の「不幸」は、冷泉も光源氏も関知するところでは一切ない。そうあってみれば、八宮が『宇治』とい

う〈場〉に追いやられるのが、冷泉や光源氏のせいとばかりも言えなくなる。八宮が「負なる存在」として対置される対象が、本当に冷泉や光源氏なのか、という疑問も当然浮上してくる。例えば、東宮ポストをめぐる争いに敗れたとしても、ｂｃｄの「不幸」が仮になかったならば、八宮は「都」に留まれたかもしれない。後見者が健在で政界で力を振るっていれば、また邸が焼失していなければ、あるいは仮に焼失したところで「都」に別邸があれば、八宮は「宇治」にまで引き籠もらなくて済んだ。ｄに「移ろひ住み給ふべき所の、よろしきもなかりければ」とあり、八宮がまず「都」内での転住に思いを巡らせていたことが知られる。八宮は「都」にいたかった。点線部、八宮が「あはれにおぼさる」のは、まず「都」を「住み離れ」ることなのである。つまり、八宮の「宇治」行きとは、冷泉や光源氏に対する敗北を意味するのではなく、「都という〈場〉」の喪失、つまり「都の『栄華』」の喪失をまず意味するのである。従って、我々が八宮の「宇治」退去という事象に読み取らねばならないのは、八宮が冷泉や光源氏に対照的に配置された「負なる存在」ということなのではなく、八宮が自身に本来あり得た「都の『栄華』」の喪失、ということなのではないか。八宮は、あくまで、「都」で享受し得た「都の『栄華』」の可能性を完全に喪失するがゆえ、そして、自らにあり得た「都の『栄華』」に対する「負なる存在」となるがゆえ、「『宇治』という〈場〉」に下るのである。

「『宇治』という〈場〉」は、決して冷泉や光源氏の力と対照的な〈場〉なのではない。それは、「都」という「栄華」の〈場〉とこそ対照される〈場〉なのである。そして、八宮は、「都の『栄華』」にことごとく反する諸条件を一手に引き受けることで、引き替えに「『宇治』という〈場〉」を与えられた人物だと言えるだろう。

更に注意したいことがある。八宮自身がこの「都の『栄華』」と対照的な〈場〉にいることに不満を持っている点なのである。

みかど（冷泉院）の御言ってにて、「あはれなる御すまるを人づてに聞くこと」など聞こえたまうて、

世をいとふ心は山にかよへども八重立つ雲を君やへだつる

阿闍梨、この御使を先に立てて、かの宮にまいりぬ。なのめなる際の、さるべき人の使だにまれなる山陰に、いとめづらしく待ちよろこび給て、所につけたる肴などして、さる方にもてはやし給。（八宮の）御返し、

あとたえて心すむとはなけれども世をうぢ山に宿をこそかれ

聖の方をば卑下して聞こえなし給へれば、（冷泉院は八宮が）猶世にうらみ残りけるといとおしく御覧ず。

（橋姫巻三〇七～三〇八頁）

八宮の返事を読んだ冷泉が、八宮の、「世」に対する「うらみ」を看取してしまうように、確かに、この「あとたえて」歌は、明らかに「聖の方をば卑下して」詠まれ、そこには不如意を託つ日々を過ごす八宮の無念が漂っているように思われる。冷泉に対する幾ばくかの皮肉も籠もっているのかもしれない。おそらく、八宮を「宇治という〈場〉」に下らせたものこそを「世」と見、それに対する「うらみ」の情が払拭されることなく積み残されているのだと考えられる。

八宮を「都の『栄華』」から遠ざけたものが、前に見たａｂｃｄの「不幸」であったとするなら、その「世」とは、今冷泉らが所属している世界、つまり「都の『栄華』」世界を意味するものであること疑いない。八宮は、「都の『栄華』」に対する「うらみ」の力、言い換えるなら「反栄華」の力を、長く潜在させてあったとも想像されてくる。

そうあってみれば、「宇治」が「都の『栄華』」の諸相を〈解体〉しうるのは、このような八宮に築かれた〈場〉であったからと推察されないか。薫は、八宮に傾倒するがゆえに大君との恋を経験し、またそれゆえに中君、浮舟へと目を向ける。前にも見たとおり、薫が宇治で取り結ぶ人間関係は、薫を「都」の「権力の網の目」から切り離し、薫の「栄華」を、本来あり得たそれから遠ざけていく。薫と同調した匂宮においても、中君との恋を経験することで、夕霧ら「都」の「権力の網の目」の形成者に大打撃を与え、匂宮自らも本来あり得た「栄華」からは遠ざかっていった。「罪の恋と栄華」の〈層〉も、「恋と栄華」の〈層〉も、いずれもが『『宇治』という〈場〉」と関わることでその「栄華」を滞らせていく。それは、八宮が「都の『栄華』」と逆行するかのごとく、その対極に移動させられた人物だからではないのか。「宇治」が「反栄華」の力を発生する〈場〉であり、「宇治」の人々がその力をそれぞれ体現しているからではないのか。

このように考えたとき、宇治世界の、そして宇治十帖の、源氏物語全体に果たす機能の詳細が更に明らかになってくるように思う。『『宇治』という〈場〉」は、まず薫や匂宮らを取り込むことで「都」の「罪の恋と栄華」の〈層〉の〈解体〉へと起動する。そして、それを夕霧の作り上げた「権力の網の目」へと波及させ、「都」の「恋と栄華」の〈層〉の〈解体〉へと作用する。つまり、『『宇治』という〈場〉」の物語、宇治十帖とは、源氏物語において〈二層〉の〈解体〉を連動させ、その「栄華」の進行をコントロールする媒介者として機能しているのだ。対置されるべき〈二層〉のうち、まず「罪の恋と栄華」の〈層〉に〈解体〉のための「反栄華」の力を振り向け、続いて「恋と栄華」の〈層〉の〈解体〉のためにそれを振り向ける、あたかもエネルギー分配機のごとく宇治十帖は機能しているのである。「都」の〈二層〉の「栄華」の力と、「宇治」の「反栄華」の力。両者の対照的な力が対峙し、せめぎ合う構図になっているのである。

しかし、ここでまた大きな疑問も浮上する。周知の通り、宇治十帖の始発近く、椎本巻において八宮はこの世を去ってしまう。そのような人物が、果たして宇治十帖の「反栄華」の力の、真の力源たりうるのだろうか。宇治川対岸での薫や匂宮の笛の演奏をほの聴いた八宮についての叙述を引用する。

「あはれに久しう成にけりや。かやうの遊びなどもせで、あるにもあらで過ぐし来にける年月の、さすがに多く数へらるゝこそかひなけれ。」などの給ついでにも、姫君たちの御有さまあたらしく、かゝる山懐にひき籠めてはやまずもがな、とおぼしつゞけらる。

（椎本巻三四一～三四二頁）

八宮は、「かやうの遊びなど」が日常だった「都」での生活を思い起こすことで、「姫君たち」を「かゝる山懐にひき籠めてはやまずもがな」、つまり、都のしかるべき人物と縁付けたい、と思いを致す。その直後に姫君たちへ与えられる八宮の遺戒「おぼろけのよすがならで…」（椎本巻三四三頁）との一節も、ここでの八宮の志向の延長上に位置付けられるべきものであろうから、都の高貴な人物との結婚をむしろ期待した言辞と見るべきであろう。いわば八宮は、かつて自分が歩んでいた「都の『栄華』」に思いを致すことによって、姫君たちの結婚に「都のしかるべき人物」という必要条件を与えたのだ。つまり、八宮は、今井久代氏の言を借りるならば、「聖の世界を志向しながら俗世の誇りや欲望を棄てきれぬ業を抱えた父」[19]として描かれているのだ。

このように、八宮を、むしろ「都の『栄華』」に拘泥する人物と捉えたとき、その「都の『栄華』」の対極で、それと対峙しなければならない「反栄華」の力を湧出させる人物としては、いかにも不十分の感を拭えない。「反栄華」を体現する人物としては、あまりにも「都の『栄華』」を捨てきれていないのではないか。前にも述べたとおり、八宮は宇治十帖の始発近く、椎本巻で早々と姿を消す。そうあってみれば、八宮は、「反栄華」の力を潜在させつつも、それを完遂できなかった人物と言わねばならないのではないか。

伊井春樹氏は、「朧月夜との密会が発覚した後、弘徽殿大后と右大臣は政界から光源氏を葬る策を練ることになり、それにともなって東宮冷泉院を廃太子とし、八宮を新皇太子とする案が進行していたのだという。その危機意識があったからこそ、光源氏は自ら都を去って須磨へ逃げたのであり、弘徽殿方としてもそれ以上深追いして政変を遂行するまでにはいたらなかった」と述べられた。[20] 傍線箇所、光源氏が、弘徽殿方の冷泉廃太子・八宮擁立計画を知っていたからこそ須磨退去を決意した、との視角を提示しておられる点、傾聴すべきだろう。光源氏は、冷泉に取って代わって八宮が冊立されそうだという情報を早く握っていたのである。八宮の存在が、光源氏に、冷泉擁護の必然性を痛感させたとも考えられなくはない。言い換えるならば、八宮の存在があればこそ、光源

氏は須磨明石への退去を必然化されるのであり、そして明石御方との出会いを必然化されるのである。明石姫君の存在が光源氏の「罪の恋と栄華」の物語〈層〉に必要不可欠な要素である以上、この〈層〉は、八宮の存在という条件があってこそ生成し得たとも言える。つまり、八宮は、光源氏の「罪の恋と栄華」の〈層〉に真に対峙しているとは言えない。八宮は、「都の『栄華』」に対して、真に対極の位置にいるわけではなく、従って、「反栄華」を真に体現し完遂しうる人物としては造型されていないのである。

では、果たして「反栄華」の力の、真の力源は誰であろうか。八宮以上に全ての「栄華」の可能性から遠く、そして「都」の〈二層〉の「栄華」を、いずれも〈解体〉に導く強大な力源。そう、その力源こそ浮舟である。薫、匂宮、いずれもを「『宇治』という〈場〉」に惹き付け、両者を、共に「都」の「権力の網の目」から切り離す浮舟こそ「反栄華」の体現者である。特に匂宮は「立坊予定者」であり、いずれ帝として即位することを約束された人物である。それが浮舟に惹き付けられることで、都の「権力の網の目」、そして「都の『栄華』」の体制に少なからぬ影響が及ぶことは想像に難くない。浮舟という人物は、「都の『栄華』」を揺さぶる力を有しているのである。では、なぜ浮舟なのか。

浮舟が、安定や繁栄などといったモチーフと程遠い人物であることは、左近少将との破談や薫と結婚後の匂宮との密通などを例示するまでもないが、そもそも浮舟は、「『都の『栄華』』」にことごとく反する諸条件を一手に引き受け」て物語世界に浮上してきた八宮その人にさえ、出生を認知されない人物として物語に登場してきた。その顛末について薫に語る弁の言を引用しよう。

中将の君とてさぶらひける上らうの、心ばせなどもけしうはあらざりけるを、いと忍びてはかなき程に物の給はせける、知る人も侍らざりけるに、女子をなん生みて侍けるを、さもやあらんとおぼす事のありけるからに、あいなくわづらはしくものしきやうにおぼしなりて、又とも御覧じ入るゝこともなかりけり。あいなくそのことにおぼし懲りて、やがておほかた聖にならせ給ひにけるを…

（宿木巻九〇頁）

八宮は、浮舟の出生について、「わけもなく面倒でおもしろくないことにお思いになって、二度と（中将君を）お近付けになることもなかった」[21]のであった。八宮が、浮舟という存在そのものについて、極端なまでに不快の念を露わにしていることが知られる。言い換えるなら、そもそも八宮は、浮舟を自らと対峙的、敵対的な存在として定位していたのである。落魄の八宮からも出生を認めてもらえず、その上、生まれながらにして八宮と対峙的、敵対的な位置に据えられようとするこの浮舟こそ、八宮以上に全ての「栄華」から放擲された人物なのではないか。皇族であることまでは「喪失」し

なかった八宮に対して、皇親たる事実すら剥奪されようとするこの浮舟こそ、「都の『栄華』」に対する「反栄華」を体現するに相応しい人物なのではないか。

特に注意したいのは、波線部、「あいなくそのことにおぼし懲りて、やがておほかた聖にならせ給ひにける」とあるところである。つまり、八宮は浮舟という存在に「おぼし懲り」るがゆえに「聖」を志した、というのである。言い換えるなら、浮舟の存在が八宮を俗聖に変える力源であった、ということである。浮舟の方が先なのである。宇治世界を築き上げる八宮その人を、その「宇治」に引き寄せたのは、実は浮舟だったのであり、従って、「『宇治』という〈場〉」は浮舟という存在があればこそ切り開かれた〈場〉であった。つまり、全ての力源は浮舟だったのであり、浮舟こそが「『宇治』という〈場〉」の中心だったのである。

そうあってみれば、浮舟は、極めて大きな力を付与されてこの物語に登場したことになる。強大な「都の『栄華』」に対抗するだけの「反栄華」の力を、ひとり担っていることになるからだ。神田龍身氏は、「逆説的な意味で」と注を付しつつ、「浮舟物語とは光源氏にかわる中心生成の物語であった」、「全員一致のもとに社会の底辺部に押しやられてしまっているようなネガティブな中心でそれはある。光源氏と浮舟とは、その意味で奇妙なかたちで対応していることにもなる」とされた。[22] 氏が、周囲をことごとく惹き付ける「中心」光源氏と、逆に周囲からことごとく排斥される「ネガティブな中心」浮舟との対照性を強調された点、傾聴すべきである。しかし、浮舟は決して「社会の底辺部に押しやられてしまっている」ことで終わりはしない。むしろ、浮舟はそれゆえ「反栄華」のエネルギーを獲得しうるのであり、「都の『栄華』」を〈解体〉すべく機能しうる。浮舟によって、逆に「都の『栄華』」も、相対的に「底辺部に押しやられてしま」うとも言えるのである。また、これまでも見たとおり、光源氏が「都の『栄華』」の一つの〈層〉を主導するように、夕霧もそのもう一つの〈層〉を主導しているのであるから、浮舟の「対照」としてあるのは、夕霧もまた同様であることも忘れてはならない。この物語の「中心」は、「都」にふたつ、そして、確かに「宇治」にひとつある。浮舟は、光源氏、そして夕霧の切り開いた〈二層〉の「都の『栄華』」と対峙する「反栄華」の「中心」として、実に大きな力を付与されたキーパーソンなのである。

このように浮舟と八宮の存在性をそれぞれ捉え直したとき、ここにも「明暗〈一対〉」の構図が見て取れることに気付く。「明」浮舟と「暗」八宮が〈一対〉となった構図が。宇治十帖の物語は、「反栄華」のモチーフを体現する浮舟と、それを体現できない八宮との対峙の構図を抱え込んで生成している。つまり、〈二層〉構造の、それぞれの内部にあった「明暗〈一対〉」の構図は、宇治十帖の物語においても同じく内

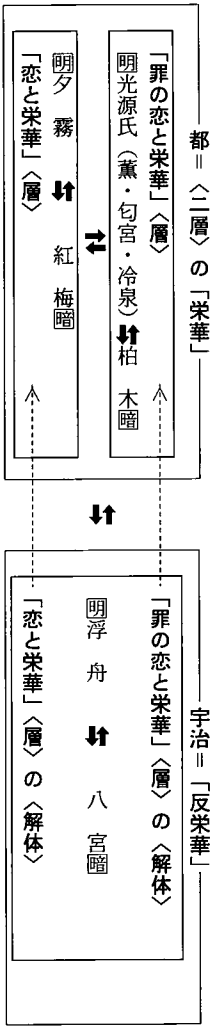
在化されていたのだ。

つまり、源氏物語の構造的特徴は次のようになっているのである。

まず、「栄華」と「反栄華」との大きな対峙が枠組みとしてある。「栄華」の諸相として、「罪の恋と栄華」の関わり方を物語る〈層〉と「恋と栄華」の関わり方を物語る〈層〉が存在し、それぞれ相容れず対峙的に屹立している。それぞれの〈層〉においては、その〈層〉のモチーフを体現的に完遂する人物とそれができない人物との「明暗〈一対〉」の対峙があり、それぞれのモチーフを際立たせている。「反栄華」の〈場〉「宇治」は、「都の『栄華』」の〈二層〉をそれぞれ〈解体〉する力源としてある。その「反栄華」の〈場〉「宇治」についても、そのモチーフを体現する人物とそうでない人物との「明暗〈一対〉」の対峙があり、そのモチーフが強調される。

敢えて図式化すると次のようになろう。

【源氏物語構造図】



四　浮舟の力と〈閉塞〉の論理

宇治十帖を通じて、まず「罪の恋と栄華」の物語〈層〉が弱体化し、次いで「恋と栄華」の物語〈層〉も同じく弱体化するありようについて辿ってきた。『宇治』という〈場〉」の力、そして浮舟の力が、結果、「都の『栄華』」の〈二層〉とも〈解体〉していくという点、言い換えるならば、〈二層〉のいずれの優位をも導かないという点が重要であると私は思うのである。

皇位継承権をいずれ持つであろう匂宮に男御子が誕生し、その母は、政略結婚とは無関係な、つまり「権力の網の目」とは無関係な宇治中君であった。確かに、「恋と栄華」の〈層〉を主導する夕霧の思惑を尻目に、光源氏の「罪の恋と栄華」の〈層〉を引き継ぐ一人である匂宮その人に未来の「栄華」が転がり込むような展開に見える。いわば、「罪の恋と栄華」の〈層〉に形成される権力体制が、源氏物語の到達

点として優位を治めるような展開に見えるのである。しかし、東宮と夕霧大君、二宮と夕霧中君、あるいは匂宮と夕霧六の君との間に、男御子が産まれた瞬間、そのような展開はありえないものとなってしまう。十五年間もの間御子に恵まれない東宮と二宮は今後も厳しいと見たところで、匂宮については、現に六の君を「すべて何事も足らひて、かたちよき人」（宿木巻六一頁）とその魅力を高く評価していたのであるから、今後男御子の誕生もないとは言えまい。そうなると、夕霧の「恋と栄華」の〈層〉が圧倒的に不利だとも言えず、〈二層〉は、いずれもが相手の〈層〉を凌駕する可能性を秘めつつ、その決め手は見せないまま、共に展開を滞らせていることになる。あたかも、「都の『栄華』」の行方について、物語が敢えて〈二層〉のいずれかに優劣をつけることなく〈閉塞〉させているかのごとくである。[23]

「権力の網の目」に関わって【系図】が僅かに変化を見せるだけで、〈二層〉の「栄華」の覇権争いは、ひとまず明確な決着を見せるのである。にもかかわらず、どちらに主導権が転がるのか、物語は手の内を明かさず、「あいまい」なまま閉じてしまう。この点が重要なのである。

ここで思い起こしたいことがある。このような〈閉塞〉した結末のありかたと極めて似通った結末が、他にもこの物語に描かれてはいなかったか。どちらに転ぶか手の内が明かされないまま、まさに〈閉塞〉するかのごとき「あいまい」な結末が。

そう、浮舟である。「あいまい」な「沈黙」を呈示し続ける浮舟である。夢浮橋巻大尾、生存を知られた浮舟は、薫から還俗を迫られる。浮舟の「法の師」たる横川僧都も、薫の口説にほだされた事とも相俟って、「彼女（浮舟）の幸いはひとえに薫という存在あってのことで、彼の人格、誠意、人間としての器量を僧都が充分に認めたからこそ浮舟の未来を託しうると考え」て、「還俗して薫のもとに戻ること」を浮舟に勧める。[24]客観的状況としては、浮舟の「還俗」に向けて進行していると言わざるを得まい。しかし、物語は、薫の手紙を明確に拒む浮舟の姿を描いてもおり、その「出家生活にしがみつこうとする心」は容易に見通せるし、それゆえ「浮舟は薫のもとに帰らないで出家生活を続けるであろう」とも充分考えられる。[25]浮舟に対する横川僧都の言葉が「玉虫色」とも言われている点については「はじめに」でも触れたが、それ以上に、浮舟自身の未来が、まさに「玉虫色」で〈閉塞〉していると言わざるを得ない。ここでは、浮舟の「沈黙」こそが、その「未来」を、そして物語の展開を〈閉塞〉させる原因となっている。

私は、浮舟の「未来」がどうなるか予見を述べたいわけでは決してない。私は、むしろ、物語がこの浮舟の〈閉塞〉を結末に配置した必然性にこそ注目している。しかし、敢えて、ここで暫く浮舟の「未来」に思いを巡らせてみよう。

もし浮舟が止むに止まれず「還俗」したとする。無論、薫は再び浮舟に惹き付けられようし、浮舟を囲って世話もしよう。しかし、それは、「都」で、ではあるまい。本来の身分の喪失、三角関係、自殺未遂、出家、還俗と、浮舟の波乱に富んだ人生は、「都の『栄華』」を享受する薫の人生と正しく対照的で、いかにも不釣り合いに見える。以前ですら浮舟との関わりは人目につかないよう気に懸けた薫なのだ。その時以上に体裁の悪い浮舟の現状にもかかわらず、手放しで浮舟を「都」に迎え入れるとは到底考えられない。おそらく薫は、大君の「形代」として、あるいはかつての浮舟自身の「形代」として、再び浮舟を「宇治」に据えようとするのではないか。ともかく、再び「宇治」辺りに据えられた浮舟に薫が通うとなると、留守がちな薫の姿は匂宮の目を引こうし、いずれこの顛末は匂宮の耳にも入ろう。そうなれば、匂宮も黙ってはいまい。浮舟の死を知った時、匂宮も薫以上に悲嘆に暮れたのだ。生存が分かったならば、何らかの手立てを講じて浮舟に近づこうとするであろう。以前でさえも困難を押して薫の隙を見て浮舟に忍んだ匂宮なのだ。つまり、遅かれ早かれ、いずれ薫、匂宮ともに、再び浮舟に目を向けることになると思われるのである。そうなれば、両者は、再び「都」の「権力の網の目」から心身ともに引き離されていくことになろうし、必然的に【系図】は、更に動く可能性を閉ざしていくことになろう。夕霧の「恋と栄華」の物語〈層〉は、権力の伸長に不利なまま、結果的に匂宮即位、宇治中君立后、若宮立坊、を迎えねばならなくなる。物語としても、「恋と栄華」の〈層〉の完敗を言挙げすることになろう。

また、逆に浮舟がこのまま横川僧都の下で出家生活を継続したとする。そうすると薫も、本稿（上）「二　宇治十帖の機能」、引用「⑧」で見たとおり、浮舟との恋を経過することによって一旦道心に立ち戻っており、さすがに浮舟を破戒させるようなことは考えにくい。出家もしていなかった宇治大君に対してさえ、道心ゆえに無体な振る舞いは思いとどまったのである。薫の後見が浮舟の出家生活を妨げない性格のものであるなら、薫の拠点は当然「都」を動くまい。ましてや、匂宮がそのような薫を出し抜いて、出家生活をする浮舟に通うなどとは考えにくい。神田龍身氏は、「宮の欲望なくして薫の恋はないし、薫が欲望しているとみえたからこそ、宮もこの恋に自らを賭けた」とされた上で、「互いが互いの欲望を相乗的に模倣し続けているのである。極論すれば、彼らの真に欲する対象は、女ではなく、対手であった」と説かれた。[28] 氏の言い口は、確かに「極論」めいているが、匂宮の恋心が薫の存在を前提として成立している、とされる点は肯うべきである。薫の影が見え隠れすればこそ、匂宮は浮舟に通いたくなるのであろう。また、既に匂宮は、浮舟の死後、早くも小宰相の君や宮の君に執心だった。それらをも振り捨てて、出家した浮舟に通おうとするだろうか。薫が通ってい

ないのならば、なおさら匂宮は動かないと考えねばなるまい。つまり、薫、匂宮とも、軸足を「都」から動かさないということになる。そうすると、特に匂宮にあっては、夕霧六の君に通う機会も多くなろうし、「都」の「権力の網の目」に関わる【系図】を動かす可能性も、そして「権力の網の目」の内部深くに取り込まれていく可能性も増大していくことになろう。匂宮が【系図】を動かした瞬間、夕霧の「恋と栄華」の〈層〉が、権力体制のありかたにおいて「罪の恋と栄華」の〈層〉に圧勝を収めることになる。

浮舟が恋に立ち戻ることが「罪の恋と栄華」の〈層〉に、恋を振り捨てることが「恋と栄華」の〈層〉に、いずれも有利に働く。

つまり、「還俗」か「求道」か、浮舟の「未来」のありかたが、「都の『栄華』」の〈二層〉と密接に関わるのである。浮舟の「未来」がどちらに転ぶかによって、浮舟の「反栄華」の力の影響対象が変化する仕組みになっているのである。そうあってみれば、浮舟の「沈黙」が打開されないままであることは、即ち、各〈層〉のせめぎ合いが決着を見ないままであることを意味することにもなる。浮舟が「沈黙」し、「未来」を〈閉塞〉させるがゆえに、その「反栄華」の力に影響を受ける「都の『栄華』」の各〈層〉の人々も向後の展開を〈閉塞〉させざるを得ない。つまり、宇治十帖の物語は、浮舟を「中心」に据え、その浮舟に主導されつつ、「都」の〈二層〉の力を〈解体〉し、その上で〈二層〉のせめぎ合いを堅持したまま〈閉塞〉させるべく機能していると言えるのである。

宇治十帖の物語が、「都の『栄華』」や「権力体制」と関わって把捉されたことは従来まず無かったと言って良い。例えば、早く藤村潔氏は、「観念的苦悩の形象化」を言われ[27]、近時原岡文子氏は、特に手習巻以降と関わって「あはれの相対化」を見通された[28]。確かに、宇治三姉妹の恋と関わって、「苦悩」に行きなずむ人々の姿がクローズアップされているし、また「都」の「あはれ」とは対照的な価値観も多く描かれている。しかし、果たして、本当に宇治十帖の物語は「栄華」や「権力」と遠い世界のそれなのであろうか。否、である。「『宇治』という〈場〉」の力は、そして浮舟の力は、確実に「都の『栄華』」に、そして〈二層〉の「権力体制」に影響を及ぼしている。宇治十帖を一貫する機能的側面に目を向けたとき、それは「反栄華」の力を「形象化」する世界として、〈二層〉の「都の『栄華』」を「相対化」すべく作用している。

この点において、三田村雅子氏の「栄華至上主義、権力至上主義を疑い始める物語[29]」との総括は卓見と言える。また、「はじめに」でも触れたが、藤井貞和氏は、「沈黙の文学」と宇治十帖の世界を総括され[30]、私がこれまで述べてきた〈閉塞〉とは異なる観点から説明しておられる。しかし、これら

両氏の把捉も、宇治十帖を一貫する機能の観点、そして源氏物語の全体構造との関わりの観点からは、決して十全とは言えない。宇治十帖は、そのような静的な物語では決してない。「栄華至上主義」、つまり「都の『栄華』」に向けられるのは、「疑い」にとどまらない、「反栄華」を掲げた〈解体〉の力である。そして、それは、薫らを強く「『宇治』という〈場〉」に惹き付け、「都の『栄華』」を弱体化させる積極的な力としてある。結末の〈閉塞〉に向けて物語を一直線に推進する、極めて動的な力源としてあるのである。また、確かに浮舟の結末は「沈黙」と見える。そして、浮舟の「救済」という主題もそれと関わっていよう。しかし、その「沈黙」は、決して静的なそれではない。そして、それはひとり浮舟の「未来」のみに影響を及ぼすものでもない。浮舟の「沈黙」は、「都の『栄華』」の〈二層〉が、弱体化したままじりじりと覇権争いを続けねばならない「未来」をも必然化する。あたかもがっぷり四つに組んだ力士が、一歩も引かぬまま消耗戦を堪え忍ぶかのように、弱体化しつつも決して終わることのない「都の『栄華』」のせめぎ合いが、そして〈二層〉のせめぎ合いが担保されることにもなる。このことの意味は大きい。

私は、かつて〈薫・匂宮・冷泉連繋体制〉の成立に光源氏の遺言が関わっている点に着目し、物語が〈薫・匂宮・冷泉連繋体制〉の裏面に「光源氏権力体制」の影を潜ませ、「光源氏対夕霧」という構図を未だ持続させている、と述べた。[31]

もし、〈薫・匂宮・冷泉連繋体制〉の存続が「光源氏権力体制」の存続をも意味すると考えるなら、〈二層〉のせめぎ合いが担保されることは、即ち物語世界における光源氏の力が担保されることとも考えられる。つまり、浮舟の存在は、そしてその「沈黙」は、物語大尾に光源氏の力が未だ生き続けてあること、そしてそれが決して消えることのない力として担保されてあることをも示唆するのである。いささか奇矯な言い方をするならば、浮舟は、この物語における光源氏の強大な存在性を保証する人物でもあるということになろう。

浮舟の「沈黙」とは、背後にこのような大きな力と力のぶつかりあいを、そして「光源氏対夕霧」という対峙の構図の残存を、明確に見通してこそ言われるべきであり、あくまで物語の全体構造と関わって捉えられるべきである。浮舟の「沈黙」は、物語の〈閉塞〉と連動するものとしてあり、そしてその〈閉塞〉は、〈二層〉の「栄華」の力と、それに対する「反栄華」の力が、宇治十帖を一貫して常に激しくぶつかりあっていることで生成する。宇治十帖とは、光源氏と夕霧にそれぞれ起因する〈二層〉の「栄華」の果てしない消耗戦を誘引する、強大な力を秘めた極めて動的な世界として機能しているのである。

宇治十帖という物語世界を以上のように把捉したとき、そして源氏物語の全体構造と関わって俯瞰したとき、第三部の物語がなぜ「連続する皇太弟」という設定の下で展開される

のか、その必然性が理解されてくるように思われる。前にも述べたとおり、東宮の後、二宮、そして匂宮が、続いて立坊予定の「皇太弟」である。しかし、皇統の「直系化」という観点においては、「皇太子」の方が望ましいのは明らかであろう。匂宮巻で夕霧大君の参内を受けている東宮は二十一歳であった。この時点で二宮は、既に「次の坊がね」(匂宮巻二一三頁)に内定している。宇治中君に匂宮との間の若宮が生まれたのが匂宮二十七歳のことであるから、それより遙かに若い東宮二十一歳の時点で「皇太子」の存在を排除せねばならない理由はなさそうである。にもかかわらず、物語はなぜ「皇太子」を予定せず、早々と「皇太弟」を設定に組み込もうとしたのであろうか。

近時、辻和良氏は、史実における「皇太弟」との比較から、「皇太弟」が「皇統内部の分裂を導き出しかねない過剰物」で「第三部に『皇太弟』が立てられなければならない理由は見えない」にもかかわらず「帝も中宮も兄弟三人の連続した皇位継承を望み、また彼らを取り巻く貴族集団も同じようにそのことを望んでいる」という物語状況の特殊性に注目され、「天皇家と夕霧六条院家との一体化の中で『脱政治』化され、『家族内』の問題へと変化した」と、主題論の観点から説明された。[32]「連続する『皇太弟』」の問題が、「家族」という主題性に収束するものか否かは別として、氏がこの大きな疑問に、主題の観点からひとつの視角を与えられた点は評価すべきであると思う。

しかし、私は全く異なった観点からこの問題に答えてみたい。物語構造との関わりにおいてこの問題を見通してみたい。

もし東宮に男御子がいれば、東宮が即位する際にその御子が「皇太子」となろう。必然的に、匂宮の立坊も、したがって宇治中君立后の可能性も霧消しよう。そして、そのことは同時に、夕霧の「恋と栄華」の〈層〉が完全に勝利することを意味する。宇治という「反栄華」の力、「栄華」を〈解体〉する力が、「恋と栄華」の物語〈層〉にのみ及ばないことになり、結果、「都」では〈夕霧権力体制〉が更に堅牢なものになろう。いかに薫が、そして匂宮が、「都」を省みず「宇治」に惹き付けられようと、そのこととは無関係にひとり夕霧の「栄華」のみが膨張し続けることになり、「反栄華」の力は、「恋と栄華」の〈層〉、つまり恋と政略結婚を前提とした権力構築のありかたに決してダメージを与えることはない。事は東宮でなく二宮にあっても同様である。多少時間が遅くなるだけで、結果的には、宇治中君を通じて「都の『栄華』」に向けられた「反栄華」の力が無効化し、夕霧の〈層〉の「栄華」のみがいずれ肥大化しよう。そうあってみれば、「恋と栄華」の〈層〉にある権力が、光源氏の「罪の恋と栄華」の〈層〉にある権力をいずれ完全に駆逐することになる。いわば、物語が、夕霧の権力生成方法を光源氏の権力生成方法よりも優位と見なしたことになるのである。

この物語は、一方の〈層〉を他方より高みに置くことは決してない。この物語において、〈二層〉は常に屹立していなければならず、だからこそ〈解体〉でさえも連動するのだ。「都の『栄華』」のありかたとして、この〈二層〉は常に対照的にせめぎ合っていなければならない。それはなぜか。それは、光源氏と夕霧が、同等の力を有しながら対極に位置する「光」と「翳」、テーゼとアンチテーゼだからである。[23] つまり、東宮や二宮に男御子があってはならないのだ。新しい「皇太子」が誕生してはならないという構造的な必然性がある。「連続する皇太弟」の問題は、〈二層〉構造を堅持するこの物語の論理と関わって読み解かれねばならない。〈二層〉構造の堅持による大尾の〈閉塞〉のため、この設定は必然化されねばならなかったのである。物語は、第三部始発時点で、〈閉塞〉の未来を言挙げしてあった。言い換えるならば、全てが、既に〈閉塞〉に向かってじりじりと歩みを進めていたのである。

おわりに

源氏物語の最も大きな構造的特徴は、「都の『栄華』」世界と「宇治の『反栄華』」世界との対峙の構図にあろう。あくなき「栄華」を求める力と、それを〈解体〉しようと働く力とがせめぎ合う全体構造になっているのだ。「栄華」を求める力を語る〈場〉として、光源氏に主導され薫らに引き継がれる「罪の恋と栄華」の物語〈層〉と夕霧に主導される「恋と栄華」の物語〈層〉が存在し、相容れることないそれらは〈二層〉を成すごとく併存しながらそれぞれ権力体制を敷設していく。それぞれの〈層〉には、その〈層〉のありようを体現するかのような「明」の人物と、それが叶わない「暗」の人物が対になって存在する。いわば、「都の『栄華』」世界は、〈二層〉に存在する、この「明暗〈一対〉」の構図によって生成しているのである。対する「反栄華」の力を語る〈場〉「宇治」は、極めて動的、積極的に都の〈二層〉の〈解体〉に働く。〈二層〉をそれぞれ弱体化させ、そのせめぎ合いを消耗戦として長期化させる。「栄華」へと向かっていたはずの物語の展開を、いわば〈閉塞〉させるこの力は、浮舟によって主導されるものであるが、その影には、この「反栄華」の力を体現し得なかった八宮の存在も見え隠れしており、ここにも「明暗〈一対〉」の構図が形成されることになる。

つまり、源氏物語は、まず「都の『栄華』の力」と「宇治の『反栄華』の力」の対峙を構え、前者については、その内部を対極的な〈二層〉に分割した上で、それぞれの内部に三様の「明暗〈一対〉」の構図を畳み込むという全体構造になっているのである。このような重層的な対峙の構図に制御される形で物語の展開は支えられているのである。ここにこそ源氏物語の構造的特徴はある。

就中、宇治十帖の、源氏物語全体に果たす機能的意義は、

この構造的特徴と関わって実に大きい。「栄華」のありかたを模索してせめぎ合った都の〈二層〉を、ことごとく否定していくアンチテーゼとして宇治十帖はあることになるからだ。そして、それによって誘引される〈閉塞〉が、逆に「〈二層〉構造の堅持」を可能にするという、いささか逆説めいた結末を、あらかじめ織り込み済みの物語として宇治十帖はあることになるからだ。宇治十帖によって、〈二層〉の〈閉塞〉、つまり「罪の恋と栄華」の権力体制と「恋と栄華」の権力体制とのいつ決着を見るとも知れない消耗戦に光が当てられることになる。そして、おそらく、この〈二層〉の「消耗戦」と関わって、源氏物語最後の主題も透視されうるはずである。それを明確化する作業については別稿に譲らねばならないが、いずれにせよ「権力」の浮沈と、それに左右され支配される人間の姿に問題が収束していくことは確かであろう。そして、宇治十帖の物語が、それに動的、積極的に関与していることも確かであろう。政治性を露わにしないかに見えた宇治十帖の物語には、実は政治と密接に連関する強大なエネルギーが秘められているのである。

その意味において、浮舟の果たす役割は極めて大きい。浮舟は、光源氏の、薫らの、そして夕霧の、強大な力とひとり対峙しなければならない。「反栄華」の象徴として、「栄華」の諸相と対峙する浮舟は、それに値する極めて大きな力を付与された人物だったのだ。〈解体〉から〈閉塞〉へ。浮舟という人物のエネルギーは、実に強力に、そして動的に機能している。それは、物語を「〈二層〉構造の堅持」という結末へと収斂させる。〈二層〉構造を物語展開の機軸とした源氏物語の論理こそが、浮舟にかような力を必然化したのであり、そして宇治十帖にかような機能を必然化したのである。

注

(17)藤本勝義氏「霧の世界・八宮・宇治の物語」(『源氏物語の人ことば　文化』新典社　平成11年9月)
(18)鷲山茂雄氏「宇治の八宮」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社　平成5年1月)
(19)今井久代氏「父の姉妹の物語—大君」(『国文学解釈と鑑賞別冊　人物造型からみた『源氏物語』』至文堂　平成10年5月)
(20)伊井春樹氏「宇治の山里」(『源氏物語を学ぶ人のために』世界思想社　平成5年3月)
(21)『新大系』本脚注
(22)神田龍身氏「分身、差異への欲望—『源氏物語』「宇治十帖」—」(『物語文学、その解体—『源氏物語』「宇治十帖」以降』有精堂　平成4年9月)
(23)(10)に同じ
(24)沢田正子氏「横川僧都—聖と俗の間—」(『国文学解釈と鑑賞別冊　源氏物語の鑑賞と基礎知識　夢浮橋』至文堂　平成17年11月)
(25)森一郎氏「女の宿世」(『源氏物語生成論』世界思想社　昭和61年4月)

(26)(22)に同じ
(27)藤村潔氏「宇治十帖の世界」(『源氏物語の構造』桜楓社　昭和41年11月)
(28)原岡文子氏「あはれの世界の相対化と浮舟の物語」(『源氏物語両義の糸』有精堂　平成3年1月)
(29)三田村雅子氏「宇治十帖、その内部と外部」(『岩波講座　日本文学史』第3巻　一一・一二世紀の文学　岩波書店　平成8年9月)
(30)(1)に同じ
(31)(4)に同じ
(32)辻和良氏「明石中宮と『皇太弟』問題―『源氏幻想』の到達点―」(『源氏物語　重層する歴史の諸相』竹林舎　平成18年4月)
(33)(5)に同じ

〈付記〉
本稿(上)の「注」において「投稿中」としていた拙稿の題目と出典は次の通り。
(4)「『夜ごとに十五日づつ』通う夕霧―浮舟の機能と物語の〈二層〉構造―」(『古代中世文学論考　第二十集』新典社　平成19年10月)
(10)「夕霧〈太政大臣予言〉の論理―〈夕霧権力体制〉の誤算と物語の〈二層〉構造―」(『國語國文』第七十六巻六号　平成19年6月)

(なかい・けんいち　本学大学院研究生)